

〔論 文〕

エコミュージアムの変化

— BOIS-DU-LUC エコミュージアムを事例に —

吉 兼 秀 夫

はじめに

我が国においてエコミュージアムは1980年代後半から新井重三(新井 1989)によって本格的に紹介され関心が高まった。全国で研究活動、活動への試み、活動実践が展開してきた。

エコミュージアムはフランスにおいて1970年前後に生まれた概念であり活動である。筆者は1990年初頭にその存在を知り、フランスにおけるエコミュージアム活動の紹介を通して我が国におけるエコミュージアムの概念及び活動の普及をめざしてきた。また、1996年から5回の海外研修調査¹⁾を行ない、その概要を理解してきた。その間我が国ではエコミュージアムの研究団体が生まれ、やがて山形県朝日町をはじめとして具体的活動が展開されるようになる。そのような中で我が国における活動実践の報告や、組織論、運営論等の研究や実践報告に期待が高まり、外国事例の紹介は一部研究者を除いて減少していった。筆者自身もこの15年間、海外事例研究を頓挫してきた。そこでこの度、17年ぶりにフランス語圏のエコミュージアムを再訪し、変わるエコミュージアムの実態を探ることを企画し、研究仲間と研修を行なった。その報告をするとともに、エコミュージアムの変化について考察したい。

I. わが国へのエコミュージアム紹介

エコミュージアム概念の日本への紹介は鶴田総一郎によって「環境博物館」の訳語で紹介されたのが最初(鶴田 1974)であるが、日本に

エコミュージアム概念を定着させるきっかけとなった紹介は新井重三の紹介からと言ってよく、1990年代初頭から盛んに概念や事例の紹介、研究会やシンポジウムが開催されるようになった。筆者も1992年より財団法人環境文化研究所内にてエコミュージアム研究会を主宰し3年間活動を行っている。そのようなエコミュージアムムーブメントの中で1995年3月には日本エコミュージアム研究会が発足し、全国のエコミュージアム研究者、エコミュージアム実践者が集って研究と情報交流が行なわれてきた。筆者が現在会長を務めるこの研究会は本年20周年を迎えた。1990年代は日本におけるエコミュージアム幕開けの年代であった。この新しい概念に博物館だけでなく多くの分野の研究者、実践者が注目し、新たな模索のはじまりに期待をした。それはバブルの崩壊を背景に従来の大きな物語に寄り添って生きていく生き方への懐疑と不可能性からの脱却を模索する時期と呼応したためと察せられた。

II. エコミュージアムの概念を巡って

エコミュージアムの概念については新井重三によって「地域社会の人々の生活、その自然環境、社会環境の発展過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会に寄与することを目的とする博物館である」(新井 1995)とG. H. リビエールの言葉として紹介している定義と、同じくリビエールの1980年1月の発展的定義)が多く研究者によって引

用され、これを基盤に個々の概念設定が行なわれてきた。1980年までにリビエールは何度も定義を修正したと言われ、80年の定義は実際にエコミュージアム活動がフランスで生まれて10年を過ぎた段階での現状を踏まえた定義である。それは以下のように語られる。

「エコミュージアムは行政と住民が共に構想し、具体化し、活用する装置である。エコミュージアムは、一枚の鏡。住民は自身を認識するために、その鏡に自らを映し出す。エコミュージアム、それは人間と自然の表現。人間はその自然環境において解釈される。エコミュージアム、それは時間の表現。エコミュージアム、それは空間の解釈。エコミュージアム、それは研究所。エコミュージアム、それは保護機関。エコミュージアム、それは学校。」²⁾

「これらの研究機関、保護機関、学校は、共通の原則に基づいている。それらが主張する文化は、その最も広い意味で理解されるべきであり、自己主張する様々な階層の尊厳と芸術的表現を知らしめる努力をするべきである。1つのものから別のものに異なるような多様性は無限である。それらは留まることなく、受容され、与えられていく。」³⁾

Ⅲ. 地域の記憶の井戸を掘る

筆者は、この発展定義をもとに概念を解説し⁴⁾、また日本エコミュージアム研究会も自らのエコミュージアム憲章を作成し、さらに2009年にその定義を次のように修正している。

「エコミュージアムは、地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである。」⁵⁾ また筆者は1998年に自らのエコミュージアムの概念を新たに発表した。「エコミュージアムは地域の中にいくつかの限られた美しい景観や自然、大事な文化財や記念物があるというのではなく、地域の中にあるすべての素材に価値があり、それらが一体となってはじめて地域は地域とな

ると考えるものである。エコミュージアムは一定領域(テリトリー)内で地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された記憶(遺産)を地域全体の中で保存・展示・活用していく博物館づくりである。それは地域遺産の遺産相続の仕掛けづくりとそのための運動であるとも考えられる。エコミュージアムは従来の博物館のように建物の中に資料を集めて展示するだけではなく、テリトリー全体を展示室として、地域の遺産・記憶を本来の場で保存活用しようとするものである。それは地域の姿を映す鏡を構成するものである。また、収集・保存しようとするものはあくまでも住民の記憶である。エコミュージアムの主体は住民である。その住民がアイデンティティを感じるテリトリーの中で大切にしたいという記憶を住民さらには来訪者(観光客)にも理解できるように工夫する。つまり地域を等身大で映す鏡を作り、その鏡を通して将来の地域像を考えていこうとするものである。それは住民にとっても観光客にとっても何気なく訪ねて否応なく理解する生涯学習機関というべきものである」⁶⁾

エコミュージアムは変化すると言われる。それは地域全体を博物館と見立て、地域全体を展示室とする活動により、地域の変化が活動内容を変化させ、地域へのまなごし及びまなごしに影響を与える社会変化や学術的見解の変化によってエコミュージアムと言う「鏡」に映し出される姿が変化するからである。また定義に見るようにその概念も変化している。

Ⅳ. エコミュージアムの事例報告 —変化を意識しながら—

1997年、筆者はベルギーのEcomusee regional du Centreを訪問した。その際の記録は同行した大原による詳しいレポートが出版されている(大原 1999)。2015年8月、現地を再訪し、エコミュージアムの変化を調査した。本論文では訪問した3地区(L'Ecomusée de Bois-du-Luc, Ecomusee du Viroin,

Ecomusee du L'Avesnois)の中からベルギーのL'Ecomusée de Bois-du-Lucについて報告する。他のエコミュージアムについては稿を変えて報告する。

1. L'Ecomusée de Bois-du-Lucの成り立ち

大原(1999 p.96)の著作に紹介があるが、今回の調査で改めてエコミュージアムの発足の経緯を聞いた。⁷⁾

当地区は石炭産業の中心地区であった。この地区には病院や協会等を始め様々な公共施設も存在していた。この炭坑の閉山と当時の地域の記憶の収集保存がエコミュージアム発足のきっかけと言える。

1973年の炭坑の操業停止に当たり、Bois-du-Luc株式会社は会社の処分措置を決定し、株主に対し妥当な配当金を保証する為に文化遺産の保護に努めた。また、旧労働者の年金保証、炭鉱作業による労災補償などの社会義務を果たすことも受諾している。処分措置の一環として、利益よりもコスト高で決済上の赤字となっている旧労働者用住居の売却を提案した。閉鎖発表によりCarrés(旧炭鉱労働者住居の名称)の住民は、住居を失うことを危惧し、権利擁護委員会が発足した。1974年10月14日、国がCarrésを買収し、国立ハウジング協会、引き続きワロン地域に改築を委託した。

産業遺産として最も重要な要素の保存、公文書や証言・証拠の保存を目的として、地域圏(Region de Centre)の産業組織や歴史家は1975年に非営利組織「C. H. A. I. エノー州歴史及び産業考古学センター」を創設し、1979年5月Bois-du-Luc炭鉱用地を政府から買い戻した。産業用建築物の復元工事は1981～1983年に施工された。

1983年5月18日、ベルギー最初の地域圏エコミュージアムが設立される。フランスやケベック州のエコミュージアム同様、その基礎となったのは「テリトリー、住民、歴史」の3要素である。エコミュージアムが目標としたのは、地域圏の対象範囲である地域の知識、配置整

理、開発を目的とした文化開発集合プロジェクトに住民の参加を促すことであった。これらの活動はテーマ別展示から文書館、オブジェ、地域文化遺産である建築物の運営管理に至るまでを対象範囲としていた。

1994年、Carrésはワロン行政地域政府から、改装・改築工事の保証をした福祉住宅組織である《Le Foyer louviérois》に譲渡された。第2次都市計画は、Carrésの住民約600名を対象にした社会・経済的復帰を基盤とした社会政策面に目標を定め、対象住民と地域圏のエコミュージアム観光プロジェクト間の強い活性化を維持してきた。そこではパブや催し物会場の経営管理、文化交流目的の飲食店の創設、産業施設に於ける受け入れ体制などが行なわれた。

ワロン行政地域政府が所有するBois du Lucのサイトは1994年に文化財指定を受け、1999年には特別サイトとしての認可を受けた。産業用地部分は、Feder/Objectif I(地域開発を目的とした欧州連合&ワロン行政地域政府のプロジェクト)の枠組みの一環として、《人と機械》をテーマとした観光プロジェクトの開発を可能とする為に、1995年エコミュージアムが所在する地域圏と長期リース契約を結んだ。1999年3月工事が開始された。プロジェクト全体が完成したのは2000年の春であった。1997年筆者が訪問した際その構想はすでにあり、事業を進めようとしているとの説明を受けていた。当時の印象では炭坑をアミューズメント施設にして観光



図1. 炭坑へ入る建物(中が資料館)

に供するようにしたいとの発言であった。筆者は勝手に佐渡金山のような施設を創造し、どのような修復になっているのか心配しながら今回訪問した。その点は後述。

このエコミュージアムの発足にあたっては初代館長のジャックリエバン (Jacques LIEBIN) のキーパーソンとしての貢献度が大きく、館長を退任する前に彼が語った言葉がその精神を表している。「中世から今日まで、Bois du Luc は大きな変化を遂げてきた。資本の為に資本によって生まれ、人間の為に人間によって築かれ、現在は別の人間の生活の場となっている。19世紀に於ける類まれな父権主義の証明、時が拭い去ることのできないワロン炭鉱労働者の危険で冒険的な足跡など、その全容を無傷のまま私達が後世に伝えていく歴史である。これらは色褪せたり、破損されたり、消滅したりする可能性に晒されながらも、仕事や機械に立ち向かっている人間の姿を後世に伝承する為に、保存され、復元され、整理・調整された。」⁸⁾ エコミュージアムが大切にする「記憶」「時間軸」「住民・労働者」を基軸に置いた取り組みに立ち向かっていたことがうかがわれる。

2. 名称とテリトリーの変更

さて、2000年までに炭坑サイトの改修等初期プロジェクトが終了し、リエバンは退任した。かわって新館長及び理事が誕生した。新体制がエコミュージアムのテリトリーを変更した。それまではCentre地域全体に焦点を当てていた活動を変え、Bois du Luc地区(基礎自治体)に焦点を当てることになったという。Centre地域圏の場合の人口規模は25万人であったが、Bois du Lucを含むLa louviere市は25,000人であり、Bois du Lucコミューンの人口は500-600人でしかない。つまりテリトリーを大幅に縮小したことになる。ただし、これまでのRegion(地域圏)が関心の外に完全におかれ、縁が切れたのではなく、他地域と協力関係は一定維持されているという。新しいテリトリーであるBois du Lucは最小のコミューン単位で旧村(集落に近

い)にあたる。今は11のコミューンが合併して行政単位としてはLa louviereが基本行政単位である(役所、議会が存在する)。なぜテリトリーを縮小したのかははっきりとした回答は得られなかったが、一つは実質的な活動範囲(主たる記憶収集対象地区)とテリトリーをあわせることで、より集中した活動を実現する。今ひとつは社会背景として、行政関係の力関係として縮小せざるを得なかった点があるのではないかと思われる。ベルギーは複雑な行政組織になっており、言語圏(ここではフランス語圏コミュニティ)、行政地域政府(ここではワロン行政地域政府)、州(エノー州)、市町村(ここではラルビエール)、コミューン(集落に近い)ここではBois du Luc)と入れ子状態になっており、また文化財行政と観光行政は別個の支配関係になっている。このような複雑な行政関係の中で広域のテリトリーを維持することが困難となったのではないかと思われる。

質疑に応じた企画官はテーマが絞られ活動がしやすくなったと回答している。これには大きな視点から地域を理解することが大切であるが、住民からすると身近な地域の方が興味を持って協力しやすく賛同を得やすいということもあるであろう。その上で、地域同士が連携し協力しあうと言うことがエコミュージアムらしい方向なのかもしれない。このエコミュージアムの場合、最初に広域テリトリーを設定し大きな文化圏からスタートしてしまったと言えるかもしれない。小さなテリトリーからはじまり、周辺地区との連携によってテリトリーを拡大することが筆者ら日本のエコミュージアム研究者は予測してきたがこの場合は逆の方向だったということである。なお、今後新たな展開が起こることは考えられる。なお我々エコミュージアムを推進する立場として心がけるべきは、日本で最初に紹介されたお手本としてのフランスのバス・セヌエコミュージアムがキーパーソンであった館長の退任後活動が縮小したように、Bois du Lucにおいても初代館長が交替したあと大きな活動内容に変化が生じているとし

Mar. 2016

エコミュージアムの変化

たら活動を持続する体制づくりが課題となると
いう点である。

3. 世界文化遺産としての Bois du Luc

2012年 Bois du Luc 地区は世界遺産「ワロン
地方の主要な鉱山遺跡群」に登録されている。
ユネスコに登録されたのはワロン地域の主要炭
坑群で、対象はベルギーの4つの炭坑である。
それはエノー州のシャルロアのグラン・オル
ニュ (Grand-Hornu), エノー州のモンスのカ
ジエの森 (Le Bois du Cazier), リエージュ州の
ブレニー・ミーヌ (Blegny-Mine) とボワ・デュ
ルック (Bois du Luc) である。これらは個々の
性格が異なり、ブレニー・ミーヌはまだ生産を
している生きた炭坑。グラン・オルニュは19世
紀前半にブルーノ・ルナルがデザインした炭
鉱労働者のための街。カジエの森は大きな炭
鉱事故があった記憶を持つ炭坑。ボワ・デュ
ルックはヨーロッパで最も古い炭坑であり、当時の
全てのインフラがセットで残っている炭坑であ
る。これらことから石炭産業の全貌を理解する
重要な遺産群として対象となったのである。

Bois du Luc はエコミュージアム活動の中
心であり、炭坑の記憶をハードなインフラと
ともに収集してきた歴史がある。しかし、エコ
ミュージアムの活動の実績が世界遺産登録に影
響したかとの問いに、担当の企画官は「non」と
回答した。Bois du Luc における世界遺産登録
の要件は石炭産業(企業城下町と言った方が分
かりやすい)の全ての要素がセットで残ってい
る(工場、管理職の施設、従業員住宅、協会、病
院などのハードな側面)ことによるのであり、
エコミュージアム活動とは関係ないと言いき
った。筆者としてはかなり違和感のある回答で
あったが、エコミュージアムが時間と空間の博
物館であり、対象(環境)との関係に注目するの
に対し、世界遺産はものに注目した結果とい
うことに対してその概念の受容を拒んだのかも
しれない。ただ、工場閉鎖後、現場で施設を保存
し、活用し、地域の記憶を収集しながら地域に
貢献しようとしてきたことが世界遺産登録への

サポートになっていることは間違いないであ
ろう。また、1996年に建築物がワロン地域文化
遺産指定を受けていたこと、2011年ワロン地
域から建物に限らず全ての周辺環境、ボタ山
などが文化遺産指定されたことは大きな要
因だったといえるし、そのような方向はエコ
ミュージアムの精神に合致した方向であつた
と言える。世界遺産登録の4地区が協力し
た観光活動を行う中で新たな共通テーマを
設定し、今後エコミュージアム活動のテリ
トリーを変更することは皆無とは言えない
であろう。世界遺産登録は海外からの観
光客を呼び込む効果を少ないものもたら
している。筆者はボトムアップの地域の活
動がその全貌をあぶり出し、世界遺産登
録への道を付けたと評価したい。

4. 活動状況

まず、エコミュージアムの活動状況を概観
する。エコミュージアムは、年間営業で月曜
日及び祭日は閉館している。3月から10
月末の火曜日から金曜日は9時から17時
まで開館で、オーディオガイド付きツア
ーは15時が最終スタートになる。週末は
10時から18時まで開館している。オー
ディオガイド付きツアーは16時が最終
スタートになる。ガイド付きツアーは10
時、14時、16時の3回行われている。11
月から3月までは火曜日から金曜日の9
時から17時に開館している。オーディオ
ガイド付きツアーは15時が最終スタート
になる。週末は閉館であるが予約によ
って利用できる。なおガイド付きツア
ーはフランス語、オランダ語、英語、イ
タリア語で提供され、オーディオガイド
も同じ4カ国語で準備されている。見学
料はオーディオガイド付きが9ユーロ(一
般)。ガイド付きツアーは6歳未満無料、
6-18歳6ユーロ、19-59歳11ユーロ、
60歳以上10ユーロとなっている。カー
ド払いは可能である。身体障害者の見学
は部分的に可能である。予約する場合は
1週間前までに行なう。なお、5月から
10月の第1日曜日は入場無料である。こ
の日には15時から鉱山町ツアーを実施
している。

これらの状況は1997年当時に比べ、開館時間が長くなっている点に変化がみられ(土日は午後のみ開館であった)、ガイドツアー内容も充実していた。

5. プログラム

エコミュージアム主催でのプログラムを年間通して実施している。特に中心となる教育プログラムをいくつか事例を列挙する。

① Bois du Lucの宝探し

対象10-14歳、所用2時間、料金1ユーロ 最大60人(bois du lucの集落を歩いて理解する)

② 鉱山生活探検

対象11歳以上 所用1時間半 料金2ユーロ 最大30人(鉱山の町の人々の生活を理解する)

③ 世界遺産学習

対象10-14歳 所用2時間 料金1ユーロ 最大60人(世界遺産となった当該地区の遺産の概念と特徴について理解する)

④ ボタ山発見ツアー 対象10-14歳 料金1ユーロ 最大30人(緑化しているボタ山の固有の植物等を探す活動)

エコミュージアムのその他の活動例として以下のような事例がある。この地区にはトルコ、チュニジアなど多くの炭坑労働者が移住してきた歴史がある。欧州白人以外の人種との混血人種の共同体(= Métis コミュニティー)などの特定コミュニティに属する住民とのワークショップ、実地見学等が行なわれている。

またエコミュージアムでのアクティビティの選択と組み合わせで、歴史的サントル運河のガイド付きクルーズをパートナーシップで実施している。以前と比べて活動も豊富化がみられる。

6. 来館者

来館者についてはテリトリーの縮小から大幅に減少しており、1997年当時15万人と報告された人数は、現在では1万人を切っており、2014年は5817人、最近で最も多い2012年で7975人である。大半の見学者の内訳は、ベル

ギー、フランス、オランダ、イギリス、ドイツ(多い順)となっている。2012年7月のユネスコ文化遺産指定後、海外からの見学者が少数ではあるが増加傾向にあり、約200名増加している。アメリカ合衆国、南米、オーストラリア等からの来館で、アジア諸国からの見学者は稀となっている。なお参加者の多くは現在も教育旅行であり、その点は1997年当時と変わらない。またリピートも多いという。

7. 構造

1997年調査では3つのアンテナ(サイト)と発見の小径があるとしていた。(大原1999 p.105)しかし、今回の訪問時の質問では「サテライトはない」と回答している。世界遺産登録で言えばBois du Luc集落全体に構成要件があるが、個々の建造物、ボタ山などをサテライトと呼ぶことはしていない。今回訪問したベルギー、フランスの他のエコミュージアムでもサテライト等の名称を使わなくなっており、レットル貼りによるイメージの固定等を避ける傾向があることも察せられる。

8. 組織

運営組織としては、最高決議機関として総会(構成員50人前後)があり、この下に理事会が存在する。運営は理事会で民主的に決定するのだが、理事には政治的力を持ち、助成金の要求等に力を発揮する人たちが選出される傾向が強い。理事は30人程度。それ以外に科学委員会が存在する。エコミュージアムのスタッフ(役員)は14人である。全員給与をもらっており、ワロン政府から支出される。現在館長は不在であり、インフォメーション・予約担当、エンターテイメント・教育プログラム、運営/管理、理事会、公文書保管、グラフィック&ウェブ・デザイナーの役職がある。周辺の他のエコミュージアムにも館長不在のところがあり、館長に見合う給与を支払う余裕がない等の財政問題がエコミュージアム活動に影響を与えていることがうかがわれていた。ただし、1997年には館長

を含めて4人であったスタッフが14人に増加していることは大きな変化である。また、イベント(主催プログラム)においてガイド役等が不足する場合は企画官がアルバイトを雇用し、その給与をエノー州が支払う体制もある。なお職員の採用は学芸員資格等に基づくものではなく、ポストが空くとワロン州が公募し、エコミュージアムの理事会、役員会が承認する方式をとっている。ワロン政府からは正当に支払われているかのチェックを受けている。採用決定はエコミュージアムが決めるが、雇用条件等についてはワロン州に依るということである。

9. 財政

1997年調査時の予算は年間200万ベルギーフラン(約700万円)であったが、現在はおおよそ125,000ユーロ(約1700万円)と試算される。

エコミュージアム独自の収入源は全体の20%である。その中ではガイド付きツアーの収入(単価は前述)が多い。他に入場料、グッズ販売などの収入がある。従って補助金は収入の約80%になるが、その求める先としてはラ・ルビエール市(La Louviere)エノー州(Hainaut Province)ワロン州(Region wallon 雇用援助施策として)、フランス語圏コミュニティ(Communaute Francaise)があり、EUからの直接の補助はない。1997年当時EUからの補助金の増加傾向があると回答を得ていたが、ヨーロッパ経済の変化の中で資金源にも変化があるようであり、これが活動にも影響していると思われる。ただし、ベルギー政府やワロン州等を介してEUの補助金が入ることはあり、1994年—2000年にサイトの区画整理の時にEUの資金が出たことがある。この他、EUの補助ではないが、欧州地域開発の一環として旅程造成事業を外部の補助で行ったことがある。フランスから始まり、ベルギーを通して観光の旅程づくりを行なった。その時は産業遺産を巡る旅程としてフランスと協力して行なったという。聞き取りによる数値であり、正確な資料に基づくものではないが、テリトリーの縮小にも関わらず予算

規模は増えているようである。質疑ではシンクタンク機能を持って多くの研究受託をしている事例が紹介された。またその成果は報告書等で公開されていた。

10. 施設

1997年当時見学は一部であったが、現在は坑道への入り口を見学でき、(坑道自体への立ち入りはしていない)や石炭を引き上げる施設(リフトや車両)が展示されている。写真パネルや坑道で使った掘削機械等の展示によって当時の炭坑労働者の一日の生活や労働風景を解説している。詳しい内容はガイドによって行なわれ、またオーディオガイドによって可能としている(ともに有料)。1997年当時の計画はすでに存在していたが、まだ室内は閉山時の状態のままであった。今回完成した資料館としての整備は当初予想したアミューズメント的展開ではなく、博物館的・学術的な展示になっていた。大原(1999 P100)も記載しているが、EUのプロジェクトにより未来型のディスプレイによる観光客誘致に繋がる改修が計画されていた筈であるが、予算の関係が非常に落ち着いた(きわめて地味な)改修に留まったようである。筆者にとっては満足いく改修であった。大きな自主財源を持たないエコミュージアム活動の姿を感じる部分であった。

労働者住宅は現在も修復して公営住宅とし



図2. 時計で時間経過を示し、その時間の労働や生活の記憶を展示する

て利用されているが、その外壁は以前の色に修復されていた。また1軒を使ってかつて住民によって寄付された家具によって、生きたジオラマ資料館として公開している。住宅は大きな中庭を持つコの字型の集合住宅であり、窓越しに中庭を垣間みることができ、2階には呼び寄せた家族を住ませたベッドルームの様子が再現され、多人数で暮らしていた姿を示していた。寄付された家具類は炭坑操業時の労働者の生活の記憶を色濃く残しており、エコミュージアムが大事にする記憶と時間を感じる場となっている。また労働者が集うパブ施設(公民館のような性格)もイベント用に改修されている。

1997年にはなかった装置として工場や経営人の事務室等に36体の等身大の人形が配置されていた。色は白く塗られ、暗いイメージの石炭工場を明るくする意図が見られる。人形はエコミュージアムの依頼により芸術家が製作している。モデルを使ってリアルなポーズを再現させ、製作したという。かつての労働の状況や環境を、何気なく訪ねて否応なく理解できる優れた展示演出である。

11. 連携事業

エコミュージアムは他の機関と連携しながら活動を行う。欧州連合文化首都に指定されているMonsと2015年にパートナーシップ提携を行なっている。また、地域圏内の文化センター、公文書センター「Couchant du Mons産業公文

書保存機関」、Hainaut州(エノー州)などとパートナーを組んで数種の活動計画作業を行っている。

他の炭鉱関係文化遺産に関連する博物館であるRobert Pourbaix炭鉱博物館(Bois-du-Luc)、Bois-du-Cazier(Chareloi: シャルレロワ近郊にある旧炭鉱)、Blegny(Liège: リエージュ近郊にある旧炭鉱)、Grand-Hornu(Mons: モンス近郊にある旧炭鉱)と協力体制の下に作業も行っている。

12. 今後の方向

今後の課題(希望)を聞いた。炭鉱博物館とSAICOM。(モンスに集積された産業公文書の保存機関)と科学分野に於ける合同作業を可能にし、共通合同見学を来訪者に提供する目的で、Robert Pourbaix炭鉱博物館とBois-du-Lucエコミュージアムをグループ化することを今後の方向として期待していた。変化するエコミュージアムとして炭坑が栄えた地域の記憶をベースに科学的まなごしを集積しながら地域への貢献を目指している姿がうかがわれた。

V. エコミュージアムとしての評価

さて、最後にエコミュージアムの基本要件がどのように実施されているかの点からエコミュージアムを点検し、エコミュージアムとしての変化を改めてチェックしたい。なお、この



図3. 壁の色が復元した労働者住宅



図4. 等身大人形で労働のイメージを表現

評価はエコミュージアム担当者の自己評価に基づくものである。評価のためのチェックポイントは大原らがイタリアのエコミュージアムと協力して作成したエコミュージアムチェックリストを参考にした。⁹⁾今回用意した21のチェック項目ごとに質問し、それに対して担当者が〈Yes〉と回答したか〈No〉と回答したかを最初に記述する。

①地元住民による運営・管理

〈No〉地元住民による運営管理参画は無い。運営管理に関与しているのは、産業史の専門家、ラルピエール市の代表者、Wallonie-Bruxelles連盟代表者、Hainaut州代表者などで構成される理事会メンバーによって運営管理されている。

②一般市民によるエコミュージアム活動

〈Yes〉Bois du Lucの住民の積極的受け入れを行っている。更に《La Maison de Quartier》(Bois du Lucの住民を対象として様々な一連の活動を紹介している組織)とも一緒に活動を行っている。既にこの組織の協力・支援を受けた展示会の実績があり、将来も、親善関係を保ち、新しいプロジェクトに協力して着手することを期待している。

③資産管理上での連携・協力体制

〈No〉所有権や資産管理上での地元住民や有識者・専門家と連携・協力体制はみられない。

④活動自体(プロセス)の力点

〈Yes〉活動成果よりも、活動自体に重点を置いている。

⑤地元のアーティスト等との協力活動

〈Yes〉地元、地域のアーティストと出来る限り協力した活動の実施を心がけている。

⑥ボランティア活動による実質的支援

〈No〉ボランティアは基本的に受け入れ業務と公文書のコーディング作業が主な活動である。

⑦地域独自の固有性に重点

〈No〉局所的視点に重点を置くよりも、幅広い視点に立ったプロジェクトへも参加している。

⑧地理的共通特徴のある地域との活動

〈Yes〉北フランスとベルギーの産業サイトを統合した欧州プロジェクトがある。これによ

て、書籍の合同出版、探索ルート地図の作成、その他の活動がなされている。

⑨過去、現在、未来へ繋げる持続可能性

〈Yes〉ガイド付見学では、時と空間という観点を重視している。エコミュージアムが設立された際から市民参画を重視しながら、時と空間を結ぶことをめざしている。

⑩分散タイプのエコミュージアム

〈No〉Bois du Lucの旧石炭産業会社の産業遺産(建築物及び炭鉱自体)の価値を持続し、保護するのが目的で設立されているので、当エコミュージアムはこの点で固有性を有するものであると回答しているが、この質問は〈Yes〉と解釈すべきであろう。まさに地域全体を博物館と捉える活動である。

⑪現場に於ける保存・保護、資源維持

〈Yes〉可能な範囲で積極的に行っており、修復作業やサイト保存をワロン文化遺産機構との協力体制の下で実施している。

⑫無形の遺産へ注目

〈Yes〉地域センターのアーティスト達と協力して活動作業を行っている。特に、特別展示会、貢献度の高いワークショップが対象となる。またワロン地域の見学訪問も実施しており、文化遺産めぐりの日、文学散策を実施している。

⑬持続可能な発展と資源有効活用

〈Yes〉出版物、展示会、科学的プロジェクト、活動、サイト見学などを通して蒐集品の価値向上開発に努めている。

⑭地元資産・資源の開発・変更許可

〈Yes〉地元住民の将来を向上する為の地元資産・資源の開発・変更はできる。コミュニティの日常生活向上を目的としたプロジェクトは特に無いが、市民が参加する活動を行っている。

⑮過去と現在の記録続行のプログラム

〈Yes〉炭鉱サイトに関連した種々の活動、ガイド付見学、出版物などを通して推進している。

⑯地域の知識人、学会レベルの調査研究

〈Yes〉回答であるが実施例はない。

⑰包括的で学際的・学術レベルの研究

〈Yes〉研究者や学生の研究を喜んで受け入れて

いる。出版や展示会プロジェクトに関与する科学チームが編成されており、このメンバーが学術界（関連分野の専門家）への呼びかけを行う。例として、世界的スケールの鉄道駅に関する書籍の共同著作をするに当たり、様々な領域の著者を招集する。

⑱文化と環境の関連性の包括的把握

〈No〉学校教育のプログラムの一環として「ボタ山（緑地化している）ディスカバリー・ツアー」を企画している。

⑲地元の技術と人間、自然と文化、過去と現在の関係の理解

〈Yes〉包括的な視点に立ったサイトの推進に重点を置いており、時と空間と市民参加との関連性を重視している。

⑳観光プログラムへの拡張

〈Yes〉ガイド付見学や、特有の文化的視点に重点を置いたテーマ別見学（ワロン地域の見学、文化遺産巡り）等を通して既に実行している。

㉑地元住民意識や変革、地元経済に貢献

〈Yes〉サイトと過去の価値開発に地元住民の関与を促進する目的で、可能な限り彼らと共に活動することを試みている。また、彼らが日常目にする文化遺産への意識向上を図っている。

21の項目に対して15の項目で〈Yes〉と回答している。⑩は〈Yes〉と解釈できるので、16項目でエコミュージアムの基本要件を満たしていることになる。

担当者が〈No〉と回答したのは「地元住民による管理」「資産管理上の連携」「ボランティア活動による実質的線」「地域独自の固有性に重点」「分散タイプ」「文化と環境の関連性の包括的把握」であった。分散型について筆者は〈Yes〉と判断した。全体に〈Yes〉が多い結果から従来のエコミュージアムの要件を満たしていると考えられるが、自ら〈No〉と回答したものに中に筆者らが重要視していたものが含まれており注目した。とくに「住民管理」「ボランティア活動」については「住民主体＝地域への貢献目的」との問いには当然と答えながら組織自体への

住民の参加が余り行なわれていない点は意外であった。また、地域固有の文化に焦点を当てるかの問いに幅広い視野に立つとの回答も腑に落ちない回答であった。これらの点をどのように解釈すべきか。その前に、今回訪問した3つのエコミュージアムは明らかにどれも博物館であった。日本でみられるまちづくり、地域活性化活動、観光振興、住民（ボランティア）主体の生涯学習活動とは異なる印象を得た。もともとエコミュージアムは社会に開かれた博物館、分かりやすく理解しやすい博物館をめざした点を少なくともフランス語圏では継承し、地域貢献の部分はその活動を通しての結果として意識されているのではないかと考える。また住民主体という点については設立当初は生活の記憶の証拠（記憶そのものも含めて）の寄贈という点などでわれわれには「住民主体」を意識させたが、現在はむしろ民主的な運営（民主的に選ばれた人たち、情報の公開、アクセスの自由度など）ということから担保されているという印象であった。エコミュージアム自体は科学的まなざしにより、偏見のない地域資産（記憶）の保存と活用が新しい博物館手法のもとで展開している。

そのように解釈すると〈No〉と回答された項目の意味も理解できることになる。「地域独自の固有性」についてはエコミュージアムの根幹とも捉えられるが、内向きに地域資源をお宝として護るだけではなく、幅広い視野の中で位置づけることを重視しているものと理解できる。また、地域の記憶の収集と分析により蓄えたノウハウを他の分野で応用するという意味合いも読み取れた。

VI. 考察

Bois-du-Luc エコミュージアムを事例にエコミュージアムの変化について実態を見ようと今回の調査研究は企画された。2度目の訪問の筆者にとってはその後の変化や担当者の回答に対する違和感などありつつも納得のいく結果であったが、初めての訪問者からは「どこが

Mar. 2016

エコミュージアムの変化

ミュージアムと違うの?」との疑問が寄せられた。それは先述のように博物館にしか見えないからである。

ホームページに次のようなコメントが掲載されている。意識すると次のようになる。博物館とエコミュージアムの違いは何か?なぜこの「eco」(環境)がエコミュージアムを博物館の別の場所に位置づけるのか。エコミュージアムは博物館の危機に応えた乱気流の中に現れた博物館の一形態である。厳格な保全の役割しか果たさず、冷たく不変で、今の時代を生きていない、破壊し焼き払うべき博物館である文化の要塞に殺到した流れであるという。エコミュージアムは異議申し立ての物語であり、人々の文化的関心事に接近することを望むユートピアそのものである。エコミュージアムは変貌するテリトリーに現れる活動といえる。

Bois-du-Lucについても、いくつかの部屋に限定されることなく、工房、オフィス、炭坑、病院、ボタ山、公園などすべての統合体であり、エコミュージアムの目的はコレクションではなく、環境であり社会的主題そのものであるという。¹⁰⁾

このように読むとコレクションの学術的価値に重点が置かれる博物館に対し、コレクションが語る環境と歴史(人々の暮らしの記憶)及びそのしぐみを全体像として表現しようとするエコミュージアムの特徴が現れていることが分かる。われわれはその活動自体に住民が参加する点に注目しすぎていたかもしれない。活動自体から住民の生き甲斐や、地域活性化(新たな産業も含め)に目を奪われ、生きた博物館として収集した記憶に餌を与え、野にまた放すことを怠っているのかもしれない。筆者の用語で言えば、自文化の自分化を果たし、自文化にのって歴史を創り出す人々を評価し続け、そのしくみづくりに協力する活動であり、そのためのシンクタンク機能をエコミュージアムは果たしているように見えた。そしてまさに地域を映す鏡として社会の変容がエコミュージアム活動に反映する姿を確認できた。エコミュージアム

が地域を変えるのではなく、変わる地域を映すことにもっと意識を向けるべきなのだろう。

注

- 1) 研修チームを組織し、フランス、ベルギーのエコミュージアムを訪問し、聞き取り調査を行った。「プレス・ブルギニオン・エコミュージアム」日本エコミュージアム研究会編『エコミュージアム・理念と活動——世界と日本の最新事例集』(1997・牧野出版)や日本エコミュージアム研究科大会等で報告した。
- 2) 丹青総合研究所 1993「ECOMUSEUM」12-13ページ
- 3) l'association des amies de Gerge Henri Riviere 1998「LA MUSEOLOGIE selon G. H. Riviere」Dumond 142ページ
- 4) 吉兼秀夫 1994「エコミュージアムの概念と実態」環境文化研究紀要No4 1-16ページ
- 5) 日本エコミュージアム研究会ホームページ (<http://www/jecom.jp>)
- 6) 吉兼秀夫 1998 日本観光研究学会全国大会要旨集。
- 7) 今回の聞き取り調査資料による。翻訳は同行した通訳(柏木氏)による。
- 8) 同上
- 9) 大原一興 2011「産業遺産の保存活用とエコミュージアム」かわさき産業ミュージアム講座記念論文集, 3-9ページ参照
- 10) Karima HAOUDY 2009 Le site minier du bois-du-Luc.patrimoine universel Institut du patrimoine Wallon

参考文献

- 鶴田総一郎(1974)全科協ニュース1974年 Vol.4. No. 8)
 新井重三(1987) GAZETTE Vol.2, No.3
 新井重三(1989) 野外博物館総論「博物館学雑誌」14巻 1-2 合併号 全日本博物館学会
 新井重三編著(1995)『実践 エコミュージアム入門—21世紀のまちおこし』牧野出版
 l'association des amies de Gerge Henri Riviere (1998)「LA MUSEOLOGIE selon G. H. Riviere」Dumond
 日本エコミュージアム研究会編(1997)『エコミュージアム・理念と活動——世界と日本の最新事例集』牧野出版
 大原一興(1999)『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会
 吉兼秀夫(1997)「我が国のエコミュージアムの動き」日本エコミュージアム研究会編『エコミュージアム・理念と活動——世界と日本の最新事例集』牧

野出版 43-47ページ

吉兼秀夫(1997)「プレス・ブルギニヨン・エコミュージアム」日本エコミュージアム研究会編『エコミュージアム・理念と活動——世界と日本の最新事例集』牧野出版 71-86ページ

吉兼秀夫(2000)「エコミュージアムと地域社会」石原・吉兼・安福編『新しい観光と地域社会』古今書院 84-94ページ

吉兼秀夫(2003)「生活と観光 エコミュージアムを中心に」堀川, 石井, 前田編『国際観光学を学ぶ人のために』世界思想社 168-192ページ

吉兼秀夫(2005)「自文化を自分化するエコミュージアム」月刊『地理』50巻12月号 古今書院17-23ページ

ジ)

吉兼秀夫(2009)「エコミュージアムによる地域づくり」『季刊まちづくり』22号 学芸出版28-33ページ

吉兼秀夫(2010)「観光における「図と地」論」『観光研究』Vol.22-1 日本観光研究学会 4-7ページ

吉兼秀夫(2011)「エコツーリズムとエコミュージアム」真板, 石森, 海津編『エコツーリズムを学ぶ人のために』世界思想社 93-101ページ

参考資料

<http://www.ecomuseboisduluc.be>

<http://www.jecomms.jp>